

「京都」

双京構想

歴代天皇  
ゆかりの

連続講座

双京構想推進検討会議  
(京都府・京都市・京都商工会議所)

発行元：双京構想推進検討会議(京都府・京都市・京都商工会議所)  
令和8年3月

## はじめに

### 双京構想とは

皇室の弥栄のため、また、わが国の伝統を守り、文化を発展させるために、皇室の方々に京都にもお住まいいただき、政治・経済の首都「東京」と、歴史・文化の首都「京都」の双方で、わが国の都としての機能を果たしていくという構想です。

### 双京構想連続講座とは

双京構想推進検討会議（構成：京都市、京都府、京都商工会議所）と京都市生涯学習総合センター（京都アスニー）との連携の下、アスニー特別講演会の枠組で平成二十九（二〇一七）年から毎年開催している講座です。

### 本刊について

本刊では、令和五（二〇二三）年度双京構想連続講座の抜粋をもとに、一部を補記・再構成のうえ掲載しております。

京都市情報館でも公開してまいりますので、そちらもご覧ください。



## 令和五年度 双京構想連続講座 「京都ゆかりの歴代天皇」

第一回（令和五年 八月四日）	平安前期の天皇と京都	講師 京都産業大学名誉教授 所功先生	1
第二回（令和五年 八月二十五日）	摂関政治から院政へ	講師 京都産業大学教授 久禮旦雄先生	5
第三回（令和五年 九月十五日）	鎌倉・南北朝期の天皇と京都	講師 京都産業大学名誉教授 所功先生	8
第四回（令和五年 九月二十九日）	室町・安土桃山期の天皇と京都	講師 京都産業大学教授 久禮旦雄先生	11
第五回（令和五年 十月十三日）	江戸時代の天皇と京都	講師 京都産業大学教授 若松正志先生	14
第六回（令和五年 十月二十七日）	東京時代の天皇と京都	講師 京都産業大学名誉教授 所功先生	17

# 平安前期の天皇と京都

講師 所功先生



## はじめに — 双京構想の意義

京都で「双京構想」の実現に取り組んでいますのは、単に京都市のため京都府のためだけではありません。むしろ京都が存在し機能することは、日本のためにも世界のためにも有意義だということとを、広く理解してもらい前進させていきたいからです。

その一環として、今年度の連続講座は「京都ゆかりの歴代天皇」というテーマを設けました。その第一回として、これから「平安前期の天皇と京都」というタイトルで、お話をさせていただきます。

## 一、「京都」(みやこ)の語義

本論に先立ち、念のために「京都」という言葉の意味を確認しておきます。「京都」は「京」と「都」の合称です。漢字の「京」は大きな高い丘に立つ家（宮殿）の象形文字であり、「都」は多くの人が集まる所（都会）を意味します。また、大和言葉の「みやこ」は、高貴な大君が住まう「みや」（御屋 ≡ 宮殿）の在る「こ」（処 ≡ 居所）です。そこに「みかど」（帝王）がおられるから「帝都」とも称されます。

そのミヤコは、飛鳥時代まで天皇（大王）一代ごとに宮殿を遷す慣例があり、奈良（平城）の都も七代七十余年で終わりました。従って、平安京も一代か数代で

他に遷されたかもしれません。

それが立地の良さもあって、千年以上八十数代にわたり続きたのは何故でしょうか。本日の話が、その謎解きに少しでも役立てばと思っています。

## 二、平安遷都と和氣清麻呂の建策

平安京の始まりは、ご存じのとおり、桓武天皇による遷都に遡ります。桓武天皇は、天智天皇の孫にあたる光仁天皇と、百済系渡来(帰化)人の血を引く高野新笠(たかののいがさ)との間に生まれました。即位後、仏教勢力が強大化した奈良を離れる決意をされ、当初は長岡京へ遷都されました。しかし、造営責任者である藤原種継の暗殺や、それに連座した早良親王(さわらしんのう)の廃太子など、不幸な事件が続



和氣清麻呂像(護王神社)

き、長岡京の造営は頓挫しかけます。このような危機に直面した時、造営途中の長岡

京を捨て、葛野(かどの)の地(現在の京都)へ移るべきだと強く進言したのが和氣清麻呂(わけのきよまる)です。わずか十年足らずで二度目の遷都を行うことは、莫大な費用と労力を要し、大きな危険を伴う決断でした。

けれども、清麻呂の建策を受け容れた桓武天皇は、新京への移転を執行されます。延暦十三年(七九四)の(旧暦)十月二十二日、天皇は新京へ入られました。現在の「時代祭」が行われる(新暦)十月二十二日は、この遷都の日にちなみます。

遷都の詔には、ここが「四神相応」の最適地であるとして、「山背国」(奈良山の背後の国)を「山城国」と改め、「平安京」と名付けられたのです。翌年の正月の踏歌(とうか)では「平安楽土、万年春」と歌われ、この都が万年も続く楽土であれと願っています。

## 三、「薬子の変」後に「万代の都」

しかしながら、平安京が定着するまでには、いくつもの試練がありました。すでに桓武天皇の次の

時代には平城(へいぜい)天皇と嵯峨天皇兄弟の争いが起こっています。病弱だった平城天皇は、弟の嵯峨天皇に譲位した後、旧都である奈良へ移り住まれました。しかも、寵愛する藤原薬子(ふじわらのくすこ)やその兄の仲成(なかなり)らの画策により、「再び都を平城(奈良)に戻す」という大変な詔を出されたのです。これを「薬子の変(平城太上天皇の変)」と呼びます。これは朝廷が京都と奈良に二分されるといふ、国家の重大な危機でした。

もしこれが実現されていたら、平安京はわずか十数年で廃都となっていたかもしれません。その際、嵯峨天皇は「先帝が万代の宮と定められた平安京を守らなければならぬ」という強い意志を持って対処し、結果的に勝利を収められました。

この勝利によって、都が京都から動くことはなくなり、京都が「万年の都」として歩み始めたのです。

## 四、内裏と大内裏の「和」と「漢」

平安京の宮城(大内裏)の構造についても触れてお

きます。大内裏は現在の千本丸太町周辺に位置していました。実は、この会場「京都アスニー」がある場所は、かつて大内裏の中の「造酒司」(みきのつかさ)がありました。ここでお酒を造り、宮中の行事などに供していたのです。

大内裏の中には、天皇のお住まいである「内裏」(だいら)と共に、政治や儀式を行う「朝堂院」や「豊楽院」および二官八省の役所などがありました。ここで注目したいのは、建築様式の違いです。

公的な儀式の場である大内裏の建物(大極殿など)は、中国の長安などにならない、立派な「瓦葺き」でした。一方、天皇の生活空間である内裏の建物(紫宸殿や清涼殿など)には、日本古来の「檜皮葺」(ひわだぶき)が用いられました。

つまり、外国から学ぶべき先進的な文明(唐様)は大胆に取り入れると共に、日本本来の伝統や美意識の文化(和風)も大切に残す(和風)。この「和」と「漢」の併用こそが、日本の



平安京大内裏の造酒司倉庫跡  
(京都アスニー正面入口付近)

「古典の日記念 京都市平安京創生館」展示及び  
京都アスニー(京都市生涯学習総合センター)協力

特質をよく表しています。それが平安宮の構造そのものに刻まれているのです。

内裏の中心にある紫宸殿(ししいでん)では、もと大内裏の大極殿で行われていた即位礼などの重要な儀式が、平安後期から行われるようになり、それが幕末の孝明天皇に至るまで続きました。

また、清涼殿の東南隅にある「石灰壇」(いしばいだん)では、宇多天皇の仁和四年(八八八)から毎朝、伊勢神宮や四方の神々を遥拝する「四方拝」が行われてきました。それが形を変えながら現代の皇室にも「毎朝御代拝」として受け継がれています。

## 五、幼帝と摂関政治のはじまり

本日は時間の関係で一部しかお話しできませんでしたが、少し触れておきたいことがあります。

平安朝で三代目の嵯峨天皇(上皇)が亡くなるころから、中央政界で勢力を伸ばした藤原冬嗣とその子孫(長良・基経)が、天皇の後妃に入れた娘の生んだ皇子を幼少でも即位させました。

そのみならず、幼帝の政務を代行する「摂政」(政を摂る役)を務め、さらに成長後も政務を後見する「関白」(関わり白す役)に就くようになったのです。詳しくは、次回、久禮先生にお話しいただく予定です。

## むすびに——歴史の「語り部」として

最後に、皆様にお願ひがあります。京都が歴史的価値のあるミヤコであり、そこに天皇を中心とする高雅な宮廷文化が作り出されたことを、京都の皆さまがそれぞれ理解され、それを京都に訪れる全国の方々や外国の人々にわかりやすく伝えていただきたいと思います。

たとえば、道を聞かれたついでに「ここは昔、大内裏があつた場所なんですよ」と一言添えるだけでも、相手の印象は大きく変わります。

双京構想を行政だけに任せるのではなく、皆さま一人ひとりが歴史の「語り部」となり、京都の真価を発信してください。それこそが、これからの京都の人ならではの役割だ、と考えて頂けたら幸いです。

# 摂関政治から院政へ

講師 久禮 且雄 先生



## はじめに——「摂関政治」の再評価

平安時代中期、特に宇多天皇以降の時代は、藤原氏による「摂関政治」の時代として知られています。かつては、摂政・関白に就任した藤原氏が権力をほしのままに振るつた時代だと考えられがちでしたが、近年の研究ではその評価は変わってきています。「摂政」

は幼い天皇の代理、「関白」は成人した天皇の補佐であり、

あくまで天皇の権威があつてこそその存在です。天皇がいなければ彼らの権力も成立しません。実際に行われていた政治の運



紫式部像(宇治橋)

営も、公卿(くぎょう)が集まって議論する「陣定」(じんのさだめ)という会議で出された意見を基に天皇が決裁を行っており、摂政・関白はその代行・補佐役なのです。そのあたりは大河ドラマ『光る君へ』でかなり具体的に描写されていました。摂関政治とは、天皇と藤原氏が協調して行う政治システムだったので。

## 一、一条天皇と藤原道長の時代

この時代を象徴する天皇として、一条天皇(在位九八六〜一〇二年)が挙げられます。一条天皇は文学や音楽の才能に溢れ、『源氏物語』にも親しんだ教養人でした。紫式部や清少納言が活躍し、平安女流文学



# 鎌倉・南北朝期の天皇と京都

講師 所功 先生



## はじめに——武家政権下の朝廷

歴史区分における「中世」は、保元の乱・平治の乱以降、貴族中心の社会から武家中心の社会へと移行した時代とされています。一般的には、武家の力が圧倒的となり、京都におられる天皇や朝廷は無力化したと見られがちです。

しかし、近年の研究では、中世においても天皇や上皇、朝廷の存在は不可欠であり、それらを抜きにしては中世史を語れないことが明らかになっています。今回は、この時代の転換点に立ち向かわれた二人の君主、鎌倉時代の後鳥羽上皇と、南北朝時代の後醍醐天皇をお話しします。

## 一、後鳥羽上皇と承久の変

鎌倉幕府の成立時期については、一一九二年（源頼朝の征夷大将軍就任）説と二八五年（守護・地頭設置）説があります。いずれにせよ、天皇の勅許を得て武家が権限を確立したことに変わりはありません。この武家政権の流れを変えようとしたのが、後鳥羽上皇による「承久の変」（一二二二年）です。

後鳥羽天皇は、安徳天皇が平家と共に都落ちした後に即位されたため、三種の神器が無いままで即位するという異例のスタートを切られました。上皇になられた後、幕府の専横、特に北条執権政治を正そうとして挙兵されましたが、敗北して隠岐へ配流となりました。



根上富治「元寇」  
（養正館旧蔵、神宮徴古館現蔵  
『国史絵画』、所功編『名画にみる  
國史の歩み』近代出版社より）

しかし、隠岐での生活は必ずしも悲惨なだけではありませんでした。上皇は配流先でも『新古今和歌集』の補訂を続け、有職故実書『世俗浅深秘抄』を著すなど、強靱な意志で文化的な大業を成し遂げられています。承久の変の結果、政治や軍事は幕府が担当し、天皇の役割は祭祀や学問、文化が中心になります。たとえば、元寇に際し亀山上皇が国難の打破を祈られたように、天皇は世俗の権力（幕府）の上に立ち、学問と徳望を身につけた「権威」の象徴として格別な役割を果たすという在り方が形作られていくのです。

## 二、後醍醐天皇と建武の新政

鎌倉時代の後期には、皇統（皇室の系統）が「持明院統」と「大覚寺統」に分かれ、幕府も関与して両者で皇

位を交代する「両統迭立（りょうとうてつりつ）」が慣例化しつつありました。

これに対して、天皇親政（自ら政治を行うこと）を目指して立ちあがられたのが後醍醐天皇です。大覚寺統の後醍醐天皇は、持明院統の花園天皇から「和漢の才を兼ね、年齒父の如し」と評されるほどの見識を持つておられました。

天皇は『梅松論』によれば「朕が新儀は未来の先例たるべし」と宣言し、鎌倉幕府を倒して「建武の新政」を開始されました。たとえば、自ら『建武年中行事』を著し、また、大内裏の造営を計画するなど、平安聖代（醍醐天皇の「延喜の治」）への回帰を理想とされました。しかし、急進的な改革は武士の離反を招き、足利尊氏（高氏）の寝返りによって京都を追われることとなります。

## 三、三種の神器と南北朝の動乱

京都を脱出した後醍醐天皇は吉野へ逃れ、ここで朝廷（南朝）を開き、建て



東山御文庫本  
建武年中行事

直しに努められました。その際に重要なのは、天皇が「三種の神器」を捧持して行かれたことです。尊氏は京都で持明院統の光明天皇（北朝）を擁立しましたが、神器を持たない天皇の正統性には疑念がつきまといました。

後醍醐天皇は三年後の延元四年（一三三九）八月「玉骨はたとへ南山の苔に埋もるとも、魂魄は常に北闕の天を望まむ」（『太平記』）という御遺言を残され、京都奪還の夢を抱かれたまま数え五十二歳の生涯を閉じられました。その御陵である塔尾陵は北（京都）を向いています。

その後、室町幕府三代将軍の足利義満は、北朝の正統性を確保するため、南朝との合一を画策しました。義満が提示したのは、以下の三条件です（『近衛家文書』）。

- (一) 三種の神器（京都へ）帰座あるべきの上は、御譲国の儀（南朝の後龜山天皇から北朝の後小松天皇に皇位を譲る形式）たるべきの旨、其の意を得候。
- (二) 今より以後、兩朝御流（大覚寺統と持明院統）相代々の御譲位（皇位継承）治定せしめ候ひ畢ぬ。
- (三) 諸国衙（公領）、悉（ことごとく）皆御計ひ（大覚

寺統の所管）たるべく候。

そこで、南朝の後龜山天皇は神器を持って京都へ戻られました。これによって、三種の神器は京都へ戻り、皇統は合一されました。しかしながら、義満は三つの約束を反故にしています。

### むすび——歴史が示す変革の種

後鳥羽上皇の承久の変も、後醍醐天皇の建武の新政も、その時点では敗北し、政治の実権を取り戻すことができませんでした。

しかし、その時に示された「天皇の下に政権があるべきだ」という理念は、長い時を経て江戸時代に水戸の徳川光圀などによって再評価され、幕末の王政復古に受け継がれ、明治維新により成就されました。

明治維新が単なる政権交代ではなく、古代以来の天皇親政への回帰という形をとったのは、中世における皇室の苦闘があったからこそです。歴史を長い目で見れば、一時の敗北も後の大きな変革の種になることを、この時代の天皇たちから学ぶことができます。

## 室町・安土桃山期の天皇と京都

講師 久禮 旦雄 先生



### はじめに——皇室の危機とその克服

室町時代から安土桃山時代、いわゆる戦国時代を含むこの時期の皇室については、長らく研究の空白地帯でした。かつての歴史学では、権力を持たない天皇は重要視されていなかったからです。しかし近年、研究が急速に進んでいます。戦国の動乱の中で政治的・経済的な基盤を失いながらも、なぜ天皇という存在は消滅せず、信長や秀吉といった天下人たちに必要とされたのかという問題は、研究者の大きな関心と呼んでいるのです。本日は、この問題について、具体的な危機と、それに対する皇室の対応から考えていきたいと思います。

### 一、南北朝の動乱と皇位継承の危機

建武の新政の崩壊後、朝廷は南朝と北朝に分裂しました。北朝を擁する室町幕府にとって最大の危機は、観応の擾乱（二三五〇～二三五二年）から続く混乱の中で訪れました。足利尊氏が南朝に一時的に降伏した際（正平の一統）、南朝側は京都の三種の神器を回収し、さらに北朝の天皇・上皇・皇太子を吉野へ連行してしまつたのです。京都には「神器」も天皇を指名すべき「治天の君（上皇）」もいなくなりました。天皇不在となれば、天皇から任命される征夷大將軍の正当性も崩壊します。この絶体絶命の状況下で、幕府と廷臣たちは、かつての後伏見天皇の女御であり、

広義門院と呼ばれた西園寺寧子(さいおんじねいし)を「治天の君」の代行として扱い、彼女の命によって後光厳天皇を即位させるという、前代未聞のウルトラCで皇統を繋ぎました。

その後も危機は続きます。後光厳天皇の系統は、称光天皇の代で後継者が不在となりました。そこで、かつて南朝に吉野に連行され、その後、京都に帰還していた崇光天皇の系統である「伏見宮家」から、彦仁王(後の後花園天皇)を迎えることになりました。この時、南朝の末裔(後南朝)が皇位奪還を狙って挙兵する動きもありましたが、伏見宮家からの継承によって皇統断絶の危機は回避されました。

## 二、応仁・文明の乱と後奈良天皇の写経

応仁・文明の乱(二四六七～一四七七年)は、京都の町だけでなく、朝廷のあり方も大きく変えました。それまでの朝廷は、膨大な先例と文書に基づいて政治を行ってきましたが、戦乱によって多くの貴重な記録や文庫が焼失しました。『源氏物語』の注釈書

『花鳥余情』で知られ、摂政・関白を務めた当時の大知識人の一条兼良は、戦乱の中で蔵書を奈良に避難させていますが、京都の「桃花坊文庫」は略奪の被害を受けています。先例を参照できなくなったことで、朝廷の機能は低下しました。『塵塚物語』という書物には応仁・文明の乱で東軍の中心であった山名宗全が「例」(先例)より「時」(現実の情勢)を優先すべきだと語ったと記されています。

応仁・文明の乱の後、全国的な戦国動乱の時代が続きます。その中で朝廷の経済的困窮も極まりました。後柏原天皇は、即位から二十年以上、費用不足で即位礼を行いませんでした。当時の実力者である細川政元に支援を求めても、「自分(政元)が国王(天皇)と認識しているのだから即位礼を行う必要はない」と拒絶される始末です。最終的に本願寺などの献金によって儀式は行われました。戦国時代の皇室の経済的困窮といっても、日常の生活に支障のない程度の収入は皇室領からもたらされました。しかし、重要な儀式を行う費用(その多くは関与する貴族に支払う経費)がなかったのです。



「初等科国史上」  
(国立国会図書館デジタルコレクション)

民の親でありながら、徳を持って覆うことができない」と記されています。この言葉に示された、政治権力を持たずとも民衆の苦難を我が事として祈り続ける姿勢は、現在の皇室にも継承されています。

## 三、天下人と天皇の権威

皮肉なことに、京都が荒廃し、貴族や文化人が地方へ疎開したことで、京都の文化や「天皇を中心とする国のかたち」という觀念が全国へ広まりました。

これが後に、天下人たちが秩序を再構築する際の基盤となります。織田信長は上洛後、足利義昭を將軍に就けましたが、やがて対立すると、天皇の権威を利用して義昭を牽制しました。また、全国の大名たちに上洛を命じる際も、「禁中(御所)の修理」や天皇への奉仕を名目としています。豊臣秀吉も関白という朝廷の最高職に就くことで権力を正当化しました。秀吉が京都に造営した聚楽第への後陽成天皇の行幸は、その頂点です。秀吉は諸大名に対し、「天皇の行幸を実現した私(関白)に対して、忠誠を尽くさなければならぬ」という論理で、起請文を書かせました。

戦国動乱の世において、武力だけでは得られない「正統性」(過去からの連続性)を天皇は有していました。だからこそ、信長も秀吉もそれに基づく「正当性」(同時代における妥当性)を求めたのです。室町時代から安土桃山時代の皇室は、存亡の機に瀕しながらも、文化と祈りの力でその存在意義を保ち続けました。そして、信長・秀吉による天皇の権威を用いての秩序の再建は、徳川家康による江戸幕府の成立へと引き継がれていくことになります。

# 江戸時代の天皇と京都

講師 若松 正志 先生



## はじめに——「印象が薄い」時代の真実

皆様は、江戸時代の京都や天皇にどのようなイメージをお持ちでしょうか。平安京の雅びな時代や、足利将軍家がいた室町時代、あるいは幕末の動乱期に比べると、「江戸時代の京都」は少し印象が薄いかも知れません。政治の中心が江戸に移り、人口も江戸や大坂に抜かれたこの時代、京都は衰退していたのでしょうか？ いいえ、決してそうではありません。近年の研究で、江戸時代の京都は産業・観光都市として大いに繁栄し、天皇や朝廷もまた、武家政権下にあつて独自の存在感を發揮していたことが分かってきました。本日はその実像に迫ります。

## 一、「京都ブランド」を支えたもの

十七世紀末、オランダ商館付医師として来日したドイツ人ケンペルは、著書の中で京都を「工芸や手工業や商業の中心地」と絶賛しています。織物、漆器、金工品など、京都で作られる製品は「京のもの」というだけで全国で高く評価されました。この「京都ブランド」の背景には、天皇や朝廷の存在がありました。例えば、刀鍛冶や簾(すだれ)などの記録を見ると、「禁裏(天皇)や院(上皇)に献上した」という実績が、その品質保証として機能していたことが分かります。また、京都の工芸には国際性もありました。刀の柄(つか)に使われる鮫皮(エイの皮)や、西陣織の原料である生糸は、長崎貿易を通じて輸入されたものです。鎖国時代にあつても、京都は海外の物産を取り入れ、

洗練された製品を生み出す産業都市だったのです。

## 二、観光都市・京都と「開かれた御所」

江戸時代は、戦乱が終わり平和が訪れたことで、知恩院や清水寺など多くの寺社が復興・再建されました。これに伴い、京都は観光都市としての側面を強めます。『都名所図会』などのガイドブックがベストセラーになり、多くの旅人が京都を訪れました。興味深いのは、『南総里見八犬伝』で知られる滝沢馬琴の旅記『鞆旅漫録(きりよまんろく)』の記述です。十九世紀初頭に

京都を訪れた馬琴は、七月十五日に「禁裏(御所)の御灯籠を拝見」したと記しています。当時この日は一般庶民も御所の中に入り、清涼殿に飾られた灯籠を見学すること



都名所図会「西陣」錦織躰・天鷲絨をるてい (国際日本文化研究センター所蔵)

が許されていたのです。御所の門前には茶店が出て賑わっていたともあり、江戸時代の皇室が、現代の我々が想像する以上に民衆にとって身近な存在であったことがうかがえます。

## 三、研究が進む「江戸時代の天皇」

かつて歴史学の世界でも、江戸時代の天皇は「幕府に統制された無力な存在」と見なされがちでした。しかし、教科書の記述を分析すると、近年では後水尾天皇や、女性天皇である明正天皇、幕末に近い光格天皇などの記述が増え、その役割が見直されています。江戸時代前期、幕府は「禁中並公家中諸法度」によって朝廷を統制しましたが、そこには「家柄だけでなく実力のある者を撰関に任じよ」といった能力主義的な側面もありました。中期には幕府との協調関係が築かれ、閑院宮家の創設や儀式の復興が進みます。そして後期、天明の飢饉の際には、京都の民衆が御所へ救済を求めて集まる「御千度参り」が起きました。これを受け、後桜町上皇はりんごを配り、

光格天皇は幕府に救済しよう申し入れ、幕府も動かざるを得なくなった。このように、天皇は権力を持たずとも、民衆の「父や母」として精神的な権威を持ち続けていたのです。

#### 四、日記が語る後桜町天皇の素顔

最後に、私が携わっている最新の研究成果をご紹介します。江戸時代最後の女性天皇である後桜町天皇(在位一七六一〜一七七〇年)の自筆日記(宸記)の解説です。例えば、宝暦十三年(一七六三年)九月一日の記事。この日、予期せぬ日食が起りました。当日の暦には記されておらず、御所は大騒ぎになります。天皇は「穢れ」を避けるため、急いで戸を閉め、屏風を立てて光を遮りました。さらに、「神様へのお供えはどうか」と大問題になります。結局、日食中にお供えした前例はないため、神事を取りやめることになりました。天皇は陰陽頭(おんみょうのかみ)の土御門泰邦を呼びつけて尋問します。土御門家の言い訳は「日食があることは知っていましたが、少し欠ける程度

だと思ったので暦に載せませんでした」という苦しいものでした。このような生き生きとしたエピソードは、公式の記録(実録)には残されていません。日記を読み解くことで、儀式や神事を厳格に守ろうとする天皇の真摯な姿や、当時の朝廷の慌てふためく様子がリアルに見えてくるのです。

#### むすびに——文化の基盤としての朝廷

江戸時代の天皇や公家たちは、武力や政治力ではなく、学問や和歌などの「文化」の担い手として社会に影響を与えました。和歌の秘伝を伝える「古今伝授(授)」などを通じて、大名や地方の知識人とも深く結びついていました。産業、観光、そして文化。江戸時代の京都の繁栄の基盤には、常に天皇と朝廷の存在がありました。明治以降、天皇は東京へ移されましたが、京都にはその歴史的・文化的な基盤が今も息づいています。「双京構想」を考える上でも、この江戸時代の京都が持っていた「文化の求心力」は、大きなヒントになるのではないのでしょうか。

## 東京時代の天皇と京都

講師 所功 先生



### はじめに——「双京」の歴史的事象

今年度の本講座の締め括りとして、明治以降、いわゆる「東京時代」における天皇と京都の関係について申し上げます。

明治の初めに天皇が東京へ移られ、京都は「都」としての機能を失ったかのように見えます。

しかし、京都は今なお「皇宮」の一環として京都御所が存在し、皇室との深い縁を持ち続けています。「双京構想」は、この百五十年間にわたる近現代史の中で、先人たちが守りながら築き上げてきた歴史的な成果の延長線上にあるのです。

### 一、明治天皇と京都の保存

明治天皇は嘉永五年(一八五二)、京都の中山邸(御所の北隣)でお生まれになりました。幼少期はその中山邸と御所で育ち、外祖父(生母の父)や父君(孝明天皇)などから和漢の古典や京風の和歌などを学ばれました。

明治天皇は東京で公務中の軍服姿から武骨なイメージを持たれがちですが、長らく京言葉を交えて使われる、京都風の方だったと言われています。

慶応四年(明治元年(一八六八))、天皇は紫宸殿で天神地祇を祀り、「五箇条の御誓文」で今後の「国是」を示されました。また、東京(江戸)へ鳳輦(輿)で行幸され、やがて旧江戸城が「皇城」と定められました。これ



塩崎逸陵「五箇条の御誓文」  
(所功編『名画にみる國史の歩み』近代出版社)

により官庁も大商人なども東京に移りましたから急に人口が減少し、市中は活気を失いかけてました。

この危機に立ち向かったのが、公家出身

の岩倉具視です。彼は新政府の最高実力者となりますが、「京都は七十代余の天皇・皇族が住居された由緒ある格別な地である」と強く主張しました。

現に明治十六年(一八八三)、岩倉は「京都皇宮保存策」を建議し、これに関連し明治天皇は、将来の即位礼や大嘗祭(だいじょうさい)は京都で行うという配慮(えいりよ)を示されました。このような岩倉の尽力と天皇のご決断がなければ、京都は単なる一地方都市になつていたかもしれません。

## 二、「西京」でなく「京都」での即位大礼

この岩倉構想は、明治二十二年(一八八九)に制定さ

れた『皇室典範』第十一条に「即位ノ礼及大嘗祭ハ京都ニ於テ之ヲ行フ」と明記されました。その当初案では「西京(さいきょう)」という言葉が使われかけましたが、審議で最終的に「京都」という名称で確定しました。これにより、京都は法典上も皇位継承儀礼に不可欠な「皇宮」がある都としての名誉を確立したことになります。

そのおかげで、大正天皇と昭和天皇の即位礼・大嘗祭は京都で行われました。大正四年(一九一五)の大礼では、京都御所の紫宸殿で即位礼が、また仙洞御所跡に建てられた大嘗宮で大嘗祭が行われました。さらに大規模な祝宴は当時離宮の二条城に饗宴場が設けられ、海外からの来賓も招かれました。

これらの大礼は、京都に多大な恩恵をもたらしました。主要な道路が整備され、京都駅なども改修され、宿泊や飲食施設が整うなど、都市基盤の近代化が急速に進んだのです。

また、京都御所の紫宸殿にある立派な「高御座」(たかみくら)と「御帳台」(みちようだい)は、この大正大礼の際に新調されたものです。それが昭和三年(一九二八)の大礼で同様に使われ、今なお皇位継承の

シンボルとして京都御所の紫宸殿に据え置かれています。

## 三、戦後の変化と現代の課題

ただ、昭和二十二年(一九四七)に新しく制定施行された現在の『皇室典範』では、第二十四条に「皇位の継承があつたときは、即位の礼を行う」としなくなり、「京都において之を行う」という明文が消されています。その結果、平成と令和には即位礼も大嘗祭も東京で行われることになりました。

しかしながら、京都御所は今なお「皇宮」の一部であり、高御座も御帳台も紫宸殿にあり、平成と令和の大礼に際して東京に運ばれて使用されています。

しかも、東日本大震災以降、首都機能のバックアップ可能な地域としての京都の重要性が再認識されています。また、今年(令和五年)五月には文化庁が京都へ移転しました。これは長年、京都の心ある人々が熱心に提唱してきたことの成果です。京都が名実ともに日本の「文化首都」であることが公認された意義は極めて大きいと思われれます。

## むすびに — 文化首都としての未来

かつて京都出身の梅棹忠夫博士は、「京都は観光都市ではなく、文化都市でなければならない」と説きました。単に観光客を呼んで潤えばいいのではなく、文化を発信し、尊敬される都市でなければ、京都の価値はないということです。現在、京都御所や京都御苑は通年公開され、多くの人々が訪れています。

しかし、その歴史的価値が十分に伝わっているとは言えません。私は以前から、京都御苑に「京都宮廷文化デジタルシアター」のような施設を作り、そこで過去の即位礼の様子や宮廷文化を映像で体験できる場を設けてほしいと提案しています。

東京は政治・経済の都として、京都は皇室の歴史を背景とした文化・学術の都として。この二つが並び立つ「双京構想」を、京都府・市や経済団体が中心となつて推進するだけでなく、一般の市民・府民の皆様も一人ひとりが自分事として考え、京都の真価を次世代へ、世界へ発信してほしいと念願しています。



第1回 平安前期の天皇と京都  
 第3回 鎌倉・南北朝期の天皇と京都  
 第6回 東京時代の天皇と京都  
 京都産業大学名誉教授 所 功 先生



第2回 摂関政治から院政へ  
 第4回 室町・安土桃山期の天皇と京都  
 京都産業大学教授 久禮 旦雄 先生



第5回 江戸時代の天皇と京都  
 京都産業大学教授 若松 正志 先生

過去の双京構想連続講座 一覧

- 平成二八(二〇一六年) シンポジウム  
 「京都の宮廷文化と双京構想の歴史的意義」開催
- 平成二九(二〇一七年) 第一回 双京構想連続講座
- 平成三〇(二〇一八年) 第二回 双京構想連続講座
- 令和元(二〇一九年) 第三回 双京構想連続講座
- 令和二(二〇二〇年) 第四回 双京構想連続講座
- 令和四(二〇二二年) 第五回 双京構想連続講座  
 「帝王学の教科書」
- 令和五(二〇二三年) 第六回 双京構想連続講座  
 「京都ゆかりの歴代天皇」
- 令和六(二〇二四年) 第七回 双京構想連続講座  
 「婚姻からみた京都の皇室」
- 令和七(二〇二五年) 第八回 双京構想連続講座  
 「京都の博覧会と記念行事の歴史  
 ―双京構想のルーツを探る―」